

シドニー大学における知的障害者の高等教育保障

社会福祉法人鞍手ゆたか福祉会

理事長 長谷川正人

目 次

はじめに	2
第1章 シドニー大学視察概要	2
第1節 CDS (Centre for Disabilities Studies : 障害研究センター) の概要	2
第2節 CDS 研修プログラムの概要	3
第3節 CDS 研修プログラムの内容	3
第2章 インクルーシブ教育プログラムの普及の現状	5
第1節 国際的に見たインクルーシブ教育プログラムの現状	5
第2節 Parmenter 教授による「生涯学習の重要性」	5
第3節 シドニー大学におけるインクルーシブ教育の成り立ちと経緯	6
第3章 シドニー大学におけるインクルーシブ教育の実際	6
第1節 学生や教員からみたインクルーシブ教育の印象	6
第2節 2年間のプロジェクトの内容	7
第3節 Christopher Barton とスタッフの Damada との対談	7
第4節 パイロット事業で見てきたプロジェクト成功のための7つの秘訣	8
第5節 教員と学生からのプロジェクトに対するフィードバック	9
第6節 プロジェクトの今後の方向性	10
第4章 プロジェクト参加学生インタビュー	10
第1節 ステファニーの場合	10
第2節 アイリーンの場合	11
第3節 アナリタの場合	12
第4節 アナリタの母、ラクシミの場合	13
第5章 シドニー調査で学んだこと	14
第1節 IEP (統合教育プログラム) の意義	14
第2節 IEP (統合教育プログラム) を立ち上げる力	15
第3節 IEP (統合教育プログラム) 実践の推進力	15
第4節 シドニー大学 CDS (障害者研究センター) の研究体制	16
おわりに	16

はじめに

私たち「ゆたかカレッジ」研究チームが所属する社会福祉法人鞍手ゆたか福祉会（以下「当法人」）は、4年前から知的障害者の高等教育保障の取り組みを福祉型大学「カレッジ」の実践として進めている。わが国においては、このような実践例がほとんど存在しないため、私たちは、この分野で先駆的に取り組んでいる諸外国の実践からの学びを進めてきた。まず、昨年11月にアメリカマサチューセッツ州の「マサチューセッツ大学ボストン校」など3大学を、さらに本年1月にはアメリカカリフォルニア州のUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）など3大学を視察した。そして、今回は、アメリカ以外の国の実践から学ぶことを計画し、オーストラリアのシドニー大学を視察した。

シドニー大学視察調査の目的は以下の5点である。

第1はシドニー大学における知的障害学生受け入れの理念と歴史および方向性、第2にシドニー大学における知的障害学生の大学生活の実際、第3にシドニー大学における知的障害学生に対する授業の在り方や実践とその効果、第4にシドニー大学における知的障害学生をサポートする体制、第5にシドニー大学における実践上の課題である。

私たちは、これらについて調査することにより、そこで学んだことを活かし、「ゆたかカレッジ」の今後のあり方や方向性について検討を進めたい。また、今回の調査の結果を論文にまとめ、その内容を内外に発信することにより、わが国において、知的障害学生の学びの意味についての理解を広げ、青年期の障害者が高等教育を受けることができる環境を作りたいと考えている。

第1章 シドニー大学視察概要

第1節 CDS (Centre for Disabilities Studies : 障害研究センター) の概要

1997年、オーストラリアニューサウスウェールズ州のシドニー大学 Medical Foundation Campus において、発達障害に関する研究を行うことを目的として、Trevor Parmenter 教授らがシドニー医科大学と協力し「CDDS」(Centre for Developmental Disabilities Studies)を創立し、同教授が初代センター長に就任した。当初は発達障害に特化した研究を行っていたが、2008年、研究を拡大し様々な障害についての研究行うこととなり、名称も「CDS」(Centre for Disabilities Studies)に変更された。



Medical Foundation Campus

このセンターは非営利団体で、ニューサウスウェールズ州政府や国際機関とも協力関係を持ちながら運営されている。6年前にセンター長が Patricia O' Brien に変わり現在に至っており、研究・評価・コンサルティング・専門の発展・トレーニング・臨床サービスなど行い、多くの分野で障害者の生活向上を目指している。

このセンターのビジョンは、「変革のための能力構築」である。このセンターでは、様々な活動を行っている。まず、研究活動である。障害者に関する研究を非常に活発にやっており、それは国内ば

かりではなく、国際的にも重点を置いている、また、国際的な活動を通じて、様々な研究成果を共有し、洞察力や経験と実践の成果を国際的にシェアし、様々なプロジェクトの設計や開発を進めている。次に、知的障害者に対して、卒業証書を取得できるためのコースを設けている。さらに、本センターでは、2つのクリニックを運営しており、障害学生のための医療活動も行っている。

センターに勤務している人は、医療関係者、健康科学研究者、教育者、心理学研究者、言語療法士、社会学者、法律関係者など専門職スタッフが研究チームを構成し、臨床的な研究や、構築した理論を現場に適応することによって、障害者の生活をより向上させていくための実践の発展を目指している。

第2節 CDS 研修プログラムの概要

2015年12月2日、CDSは、我々「ゆたかカレッジ」研究チームのために、10時から17時までの間に5つの研修プログラムを用意した。その内容は以下のとおりである。

プログラム1 統合教育プログラム「IEP」(Inclusive Education Program)のプレゼンテーション
(Friederike Gadow, Jamima MacDonald)

プログラム2 当事者学生、家族との意見交換
(ランチを取りながらの意見交換)

プログラム3 「CDS教育パッケージ～本人主体～」のプレゼンテーション (Kylie Gorman)

プログラム4 「生涯学習の重要性」の講話 (Trevor Parmenter)

プログラム5 「支援ニーズのための方法と評価」(I Can)のプレゼンテーション (Sam Arnold)

第3節 CDS 研修プログラムの内容

まず最初に、センター職員、IEPを受けている学生とその保護者、支援員、そして我々のチームがそれぞれ自己紹介を行い、それぞれがどういった活動をしているのかなどについて話した。

プログラム1の講師、Friederike Gadow 研究員は言語病理学を専門としており、これまでに IEP (統合教育プログラム) の研究に携わってきた一人である。講義の内容は、シドニー大学における統合教育の実情である。それは、国連障害者権利条約第24条を基本的な根拠とするものであり、これまで、世界で知的障害者における高等教育推進のイニシアティブをとっている大学等の紹介と、また、このセンターにおいてどのように統合教育が始まったのかについて話された。また Jamima MacDonald 研究員は主に教育関係に携わっており、現在の活動の内容や今後の課題について話した。



プログラム1「統合教育プログラム」

続いてプログラム2の当事者学生らへのインタビューでは、実際にIEPを受けている当事者より生の声、どのような体験をしているのか、また自らはどのような成果を感じているのかなど、大学生活の当事者ならではの発言があり、さらに保護者から見る当事者の様子などについても意見発表があった。

プログラム 3 では、心理療法を専門としており、このプロジェクトのマネージャーを務めている Kylie Gorman による「CDS 教育パッケージ～本人主体～」の説明が行われた。そのパッケージは、障害者を対象とした教育者や支援者に対する障害者支援研修プログラムであり、センターで行われている教育方法を一般向けに提供し、研修を受けたのち社会全体の理解を深め、さらに広げていこうとする活動であり、これまでに 600 人以上の一般受講者がおり、年々増加傾向がみられるとのことであった。

プログラム 4 では、生涯学習の重要性について Trevor Parmenter 名誉教授による講話があった。Parmenter 氏は 1974 年マッコーリ大学で研究を重ね、知的障害者が中等教育を修了した後も、さらに学べる環境が必要であると考へ、社会に出る前の準備機関として、「Work Preparation Center」(職業準備センター)を立ち上げた。その結果、高等学校卒業後のさらなる教育というものの重要性について確信したという。その活動は世界に広がり 1999 年には IASSIDD (国際知的発達障害学会)の会長を務めた実績を持つ。シドニー大学でセンターを創立させ、現在も、障害者にも教育の機会を設ける必要性について様々なところで講演を続け世界へ発信している。

プログラム 5 では、支援ニーズのための方法と評価について Sam Arnold 氏がプレゼンした。Arnold 氏は様々な実態を分析する中で、当事者に必要な支援とは何か、またどの程度の支援が必要とされるのかについて研究を深め、実践に活用している。そこで紹介されたのが「I CAN」という評価ツールである。このツールを繰り返し使っていくことでどれだけの成長が見られるかなど数値として現れること、このシステムがどのような役割を果たしているのかなどについて話された。



プログラム 2 「当事者学生、家族との意見交換」



プログラム 3 「CDS 教育パッケージ～本人主体～」



プログラム 4 「生涯学習の重要性」

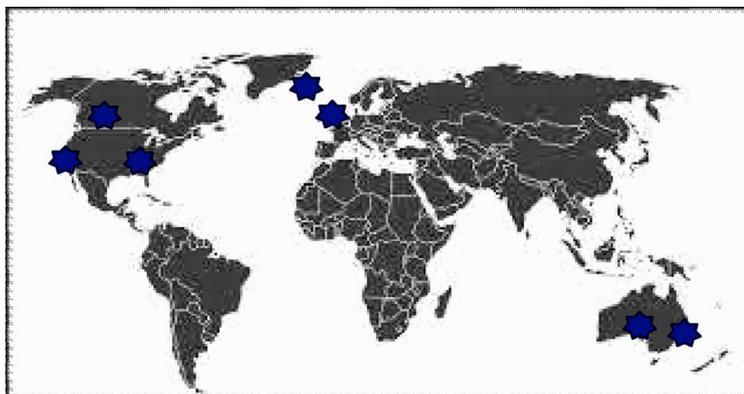


プログラム 5 「支援ニーズのための方法と評価」

第2章 インクルーシブ教育プログラムの普及の現状

第1節 国際的に見たインクルーシブ教育プログラムの現状

国連障害者権利条約の第24条には「締約国は教育について障害者の権利を認める」と謳われている。オーストラリアはこの権利条約の批准国であるため、大学教育を含めたあらゆる教育を受ける機会を障害者に提供する義務がある。しかしこうした条約を批准したにも関わらず知的障害者が大学レベルの教育を受ける機会は非常に限られている。今日、この分野は、国際的に関心の高い分野であり、



右の地図でマークが付けられている場所では何らかの大学におけるインクルーシブ教育プログラムが実践されている。カナダのブリティッシュコロンビア州のアルバータでは、知的障害者の大学教育が既に30年以上前から提供されている。また、アメリカ合衆国では、現在国内で300校以上の短大や大

学が知的障害者に対して教育の機会を提供している。なお、アメリカにおける大学の知的障害者受入形態は全体の75%が分離教育である。すなわち、学業は分離型で行われており、健常学生との社会的交流は別の場面で対応している。アイルランドでは、Trinity College（トリニティーカレッジ）がこの分野のイニシアティブをとっており、現センター長の Patricia O' Brien 教授もかつてトリニティーカレッジで勤務していたためこのセンターとも交流関係を強く持っている。このトリニティーカレッジでのプログラムのベースになっているのがハイブリットモデルと呼ばれるもので、つまり知的障害を持った学生は通常の講義にも参加でき、かつ別の授業も備えているのである。すなわち、分離と統合を兼ね備えているために“ハイブリットモデル”と呼ばれている。オーストラリアでは、大学のインクルーシブ教育を行っている大学はわずか2校である。シドニー大学はそのうちの一つであり、もう一つが南オーストラリア州アデレードにあるフリンダース大学である。フリンダース大学は1999年にスタートしており、シドニー大学は2012年にスタートしている。この両大学はいわゆる完全統合型のインテグレーション（統合教育）を行っている。

第2節 Parmenter 教授による「生涯学習の重要性」

1970年代、Trevor Parmenter 教授が知的障害児特別支援学校の校長をしていた当時、高等部卒業後は、ほとんどの生徒が世間から隔離された作業所に行っていた。そのことに、Parmenter 氏は疑問を感じていた。多くの卒業生たちは普通の職業に就くだけのスキルを持っていると思えたからだ。

Parmenter 教授は、我々に以下のことを語った。

理念上も心理学上においても中等教育を受けた生徒たちはさらに高い教育を受けるべきだと考えるのは当然である。理念上では、障害者の人たちも同じ教育を受ける権利を持っているのだといえる。しかし、教育心理学を学んだ人にとっては、知的障害者の成長時期というのが、一般の人たちよりも

発達が遅いということを考えれば、学ぶということは身体的にも知的にもさらに年を重ねた方が意味があるものになるのである。したがって、そうした子どもたちが成長していく上で、成長する時期における教育の重要性は強調しても強調しすぎることはない。18歳で卒業したあとにこれからさらに成熟していく上で、それ以降の能力を高めていくための教育というのは非常に重要であると考えられる。

第3節 シドニー大学におけるインクルーシブ教育の成り立ちと経緯

2012年、Patricia O' Brien がアイルランドのトリニティーカレッジでの経験を得た後に CDS のセンター長に就任した。アイルランドで学んだインクルーシブ教育をさらにオーストラリアで展開したいというところからプロジェクトが始まった。幸いなことに、O' Brien センター長は、その当時このインクルーシブ教育の分野に熱心だった州政府の職員と出会った。州政府の職員は非常に協力的であり、助成金を受けることができた。それにより、このプロジェクトの開始が実現したのである。プロジェクトチームの最初の取り組みとして、まず、インクルーシブ教育推進委員会の設立を行った。そして、知的障害を持つ5人の青年たちに対して6か月間大学で学ぶことに関心があるかを尋ねた。その結果、全員が大学生活を希望しその学生たちは6ヶ月間大学で学ぶことになった。助成金により、大学では、学生たちの学内での社会的交流の支援を担当するための2人のコーディネーターを雇った。また、助成金の一部をリサーチ活動にも活用した。このパイロット事業の実施により、学生たちがどのような経験をし、その中で何を獲得したのか、またメンターとして一般の学生たちがどのような体験をしたのかというリサーチも行った。シドニー大学が使ったモデルは「聴講生モデル」である。「聴講生」とは講義への参加やチュートリアル（個別指導）に参加はできるが、単位の取得ができない学生のことである。このプロジェクトに参加した学生たちは、自分が持っている強みや能力などの関心に基づいて特定の授業に参加することが求められた。この6ヶ月のパイロット事業が成功に終わったことにより、その後、実際に2年間のプログラムが導入されたのである。大学は、このコースが終った学生に対してプログラム終了の証として修了証書を渡している。

第3章 シドニー大学におけるインクルーシブ教育の実際

第1節 学生や教員からみたインクルーシブ教育の印象

最初のパイロット事業で学んだ学生たちは、この6ヶ月のパイロットプロジェクトの印象について、次のように述べている。

「6ヶ月間、大学に溶け込んでいた気がするし、受け入れてもらったようでとても満足している。あとで仕事をするときに必要なスキルを学ぶことができた。また、友だちと会って楽しむことができた。」

これは、とても重要な点である。

また、教員からのフィードバックの意見の中には、単にやらなければならないからというのではなく、「人権という意識を高めることができた」という意見があった。すなわち、学生たちにとってだけでなく、教員にとって、また大学全体にとって貴重な経験であったという意見が出ているのであ

る。また、一般学生からの意見の中には、今まで直接的に知的障害者と会ったことがない学生がこのような機会があったことをとてもポジティブにとらえていたという意見もみられた。

第2節 2年間のプロジェクトの内容

最初の半年間のパイロット事業の終了後、推進委員会は、この事業は継続して行うだけの価値のあるプロジェクトであると判断し、州政府の補助金を受けて2年間のプロジェクトを進めていくことになった。その後、2013年と2014年の2年コースがスタートし、学生は10名に増加した。大学での科目はあくまで学生自身が選択し、教員側から特定の教科の受講を進めることはしないようにした。その結果、2年間の間に10人の学生たちが学んだ教科は5つの学部に亘っている。パイロット事業で明らかになったことは、より個人ベースの支援が必要であること、そして、グローバルな視点に立って最も適切な教育方法を学び、導入するべきであるということであった。そこで補助金をさらに増額してもらい、その分を個別授業に充てることにより、マンツーマンの対応ができる形式を導入した。各学生には、メンター（一般学生のボランティア）が付いているが、メンターは徐々に増えていき、20人の学生がメンター役を希望した。2014年には、シドニー大学の中心にある伝統的な建物において、プログラムに参加している学生とメンターに対してその功績がたたえられ表彰式が行われた。

第3節 Christopher Barton とスタッフの Damada との対談

Barton は、スタッフの Damada と大学生活について対談をした。その内容は、以下のとおりである。

Damada : Barton はどうしてシドニー大学を選んだのかな？

Barton : この大学が知的障害者に大学で勉強できる機会を提供しているからだよ。高校を卒業した時に大学に行きたかったけど大学に行くための点数がなかったので、残念だなと思っていた時にシドニー大学のインクルーシブ教育を知って大学に行ってみたいと思ったんだ。実際に大学に行ってどんな教科があるのか話を聞く中で、栄養学について勉強したいと思ったんだ。栄養学を選んだ理由はもっと栄養について知りたいと思ったから。人から「どこの大学に行っているの？」とよく質問を受けるんだけど、そのときは「お父さんが行った大学と同じ大学だよ。」と答えているよ。

Damada : この事業は、若い知的障害者に対して教育の機会を提供することを目的に、2012年にスタートしました。成功するかどうか分からない中で、まず試験的に導入しました。その結果、実際に参加した学生たちの独立心がとても強く芽生え、自己主張する態度が育ってきました。そのような成果に確信する中で、その後も継続していくことになり、パイロット事業から本格プロジェクトに発展していきました。大学では、ひとりの学生に対してメンターと呼ばれる学生が2人付いて個別指導のお手伝いをするので大学で必要とされる様々な支援を提供しています。

Barton : メンターには2種類あって、メンターのひとは勉強の手伝い、もう一人のメンターは生活の面でのサポートを担当します。一緒にコーヒーを飲みに行ったりします。メンターとの関係は、うまくいったり、いかなかったりいろいろです。

第4節 パイロット事業で見えてきたプロジェクト成功のための7つの秘訣

パイロット事業の結果、プロジェクトを成功に導くためには、以下の7つの要素が必要であるということが明らかになった。

- ① プログラムをコーディネートをするスタッフが2人以上は必要であること。CDSでは、正規のスタッフと有給のパートスタッフの2人が対応にあたっている。スタッフの仕事はあくまで陰の仕事であり、各障害学生とパートナーになっているメンターがファシリテーター（陰の推進者）として、障害学生が授業を上手く受けるために一般学生と関係作りをしている。
- ② CDSの9人の学生は、強い動機を持ってプロジェクトに参加している。彼らの関心事はバラバラで、大学内にある多様な機会を利用して活動している。9人というのは一人ひとりに対し、個別に対応できる人数で、あまり多くない人数であることがポイントである。
- ③ 学生たちを受け入れている学部は6学部ある。それらは、「アート」（キャンパス内にあるシドニー芸術大学）「ヘルス・健康」「ビジネス」「社会科学」「教育」「音楽院」の6つである。IEPのベースにあるのは大学での生活のあらゆることに学生たちが積極的に参加するという点である。
- ④ プロジェクト成功の秘訣の4番目はメンターである。これがこのプロジェクトが成功した一番大きな要素である。メンターはほかの一般学生であるが、2種類あって、ひとつは勉強の部分の支援、もうひとつは社会的な支援である。この勉強の部分のメンターを「アカデミックメンター」といい、学生たちと一緒に講義を受け、不明な点を手助けしている。学生たちにとって慣れた人からの支援は安心する。また授業中のみならず、授業の前後においても必要な支援を提供している。そして、もうひとりのメンターは社会的部分を担当し、そのメンターを「ソーシャルメンター」と呼んでいる。ソーシャルメンターは、放課後一緒にコーヒーを飲んだり、同好会に参加したり、ショッピングに出かけたりしている。その他にも、本人がしたいことがあればそれに付き合う支援をしている。このメンターを決めるのは、学生とメンター希望者とが「お見合い」のような形でマッチングさせる。まずメンターになりたい人が応募して、その後、その学生がどのようなことに関心があるかについて面談し、IEPの学生とマッチメイキングをするのである。現在メンターの役割を引き受けてくれている人は20人以上にのぼっている。メンターは、原則として学期ごとに交代するが、一度メンターを経験した人は何度も応募してきてくれている。しかし、基本的に学期ごとに交代し、その度にマッチメイキングをする。
- ⑤ 5つめの構成要素はチューター（個別指導員）である。このプログラムのチューターは、シドニー大学で古代史を教えている講師である。その講師は元々、大学で古代史を教えていたが、その際に知的障害学生がその授業を受けており、その学生に強い関心を抱くことになった。そこで、その講師に有給のコンサルタントをしてもらうことになったのである。2週間に1回の頻度で、ひとりひとりに対し45分間の個人指導（チュータリング）を行っている。個人指導の目的のひとつは、学生が大学で学ぶことについてもっと理解しやすいようにすること。そしてもうひとつは、各学期の終わりに一人一人が約80人ほどの前で自分が学んだことのプレゼンテーションをする際に手伝っ

たり個人的な指導するという役割がある。

⑥ 6 つめの秘訣は、大学生のキャンパスライフである。勉強だけでなく大学における様々な社会的な活動が重要である。教員やソーシャルメンターは、学生に対し同好会やサークル活動などへの積極的な参加を勧めている。

⑦ 最後の重要な秘訣は、家族や支援者たちである。センターは家族や支援者たちと密接な関係を保ち、お互いに価値観を共有していることを確認し、それに基づいて適切なサービスを提供するということを常々心がけている。そしてそうした活動を続けながら、常に教員やメンター、学生たちからフィードバックを受けることにより、常に改善に取り組んでいるのである。

第5節 教員と学生からのプロジェクトに対するフィードバック

教員からフィードバックされた意見は以下の内容である。

「クラスの中で彼らは本当に素晴らしい学生たちです。ほかの人たちよりまじめに勉強しています。」
「自分の講義に出席してもらうのをとても楽しみにしています。常に一生懸命で集中力がすごくある。一生懸命やる姿が素晴らしいです。」

「マフューという学生は、いつもやる気満々で、ほとんどの授業に出て、会いに来てくれます。」

次に、学生たちからフィードバックされた意見は以下の内容である。

「時々、不可能なことを夢見ます。しかしその不可能が現実になった時それは奇跡と言っていいでしょう。このシドニー大学で出席する機会を頂けて、インクルーシブ教育のおかげでそういう感情を感じることができました。」

「大学に属していると感じることができる。大学が大好きです。」

「シドニー大学での IEP プログラムを受けるの前は、私は特殊学校の生徒でした。今は、独立した“大人”としてもっと広い世界で学んでいる一人の人間です。」

最後に、メンターは、日々の活動についてどう思っているのかについての意見は以下のとおりである。

「アレックスのソーシャルメンターをやっています。近くにいていろんなことが上手くいっているかを見守っている役割です。生活を楽んでいるということを保証するための役割です。」

「いろんな経験をしたり楽しむことのお手伝いをするのが私の役割です。」

「インクルージョンとは、受け入れること。一緒にすること。阻害するのではなく一緒に何かをすること。みんながリラックスすること。参加に平等の機会を提供することだと思います。」

「プログラムについての意見は、社会的、あるいは学業においてメンターが支援を提供することによって、障害を持つ学生たちに愛や、平等、幸せを共有するコミュニティが築かれる。したがって障害者が受けるべき権利を擁護されるための保証になっているのです。」

「IEP プログラムは、障害者の教育制度を作るといことがいかに重要かを教えてくれました。つまり学生たちが、主流の教育制度に合わせていくのではなく、学生たちに対して新しく創るということが大事なのです。ということでこの IEP プログラムの提供が私に対してとてもありがたいと思っています

す。」

「このプログラムに参加したということは自分の経験を豊かにしたし、様々な情報を与えられる機会にもなりました。」

第6節 プロジェクトの今後の方向性

今後、このプロジェクトを継続していく方法、州政府からの補助金の継続を指向していく方法を検討する上で懸念されている問題は、国が主導して導入された「障害者保険制度」である。この保険制度の導入により新しい機会が設けられる一方で、これまでのやり方を大きく変えなければならないところが出てきている。そこで、CDSは、今後は、「社会企業モデル」をベースにしていこうと検討している。すなわち、CDSとしては、社会的市民である企業、とりわけ慈善事業に協力的で活発な企業等にアプローチし、ビジネス関係を持ちながら、これまでのやり方を継続していくというビジネスモデルを模索している。例えば、企業がスポンサーとなり奨学金を出すとか、学生一人ひとりに対してお金を出してもらう等のことも考えている。

その一方で、これまでのプログラムをさらに改善していく努力を続けるということも推進している。また、大学のキャンパス内においてもこのプロジェクトが拡大しつつあるため、大学側の支援の規模も大きくなってきている。そこで、さらに学内での様々な活動に参加できるようロビー活動を続けていく予定である。

CDSは、今後、学生たちのインターンシップの導入も検討している。学生個々人、やりたいことは様々だが、国際的なリサーチにおいても明らかになったように、職場での経験、コミュニティでの経験を、実際の現場で行う機会を創っていくことが必要であると考えている。

第4章 プロジェクト参加学生インタビュー

第1節 ステファニーの場合



「こんにちは。私の名前は、ステファニーです。私は栄養学を勉強しました。特に、健康とスポーツといったことを勉強しました。いろんな学科を勉強しましたが、どれもとても楽しいと思いました。私はこのプログラムのことを、前にこのプログラムのコースに通っていた友だちから聞きました。その彼女の方からどういうコースだったかとか、2年間どうだったかとか聞いて知ったわけです。このプログラムに関心を持った理由は、はじめは、母が大学に行ってほ

しい、私にもっと学んでほしいという思いがあったからです。もちろん、私自身ももっと学びたいと思いました。大学生活では、私には、メンターが3人ついてくれました。まず、マンリーさんですが、彼女は、私が勉強してきたふたつの教科でいろいろ手伝ってくれました。『ヘルス&スポーツ』という教科と、『若者と文化』という教科です。2人目がグリーさんです。彼はスポーツコーチングの部分で勉強を手伝ってくれました。その2人は同じ教科を勉強していた人ではなくて、ただ自分が授業を受けるときに一緒に来てくれて隣に座ってくれたんです。3人目はミッキーさんです。彼女はソー

シャルネットワークということでもいろいろと人とのつきあいの輪を広げるときに手伝ってくれました。いろいろなお話をしました。私にとってこの大学に入って一番良かったと思うことは、この大学で勉強し始める前は、自分に自信がなくて一人では何もできませんでしたが、社会に出るためのいろいろな勉強をするということを通して、自分ひとりでも様々なことができるようになったことです。つまり、自立できたということです。一方、大学生活の中で一番難しかったことは、これから先生になろうとして勉強している教育学部の学生たちとグループプロジェクトを組んだときなのですが、そのときのコミュニケーションの手段としてフェイスブックが使われました。そのフェイスブックでは、みんなチャットをしているので、ひとつのトピックにずっと一貫して話をしているわけじゃなくて、話題がそれたり、別の話題に移っていったりということが頻繁に起こります。そのため、自分にとっては、その流れについて行けないという問題がありました。最終的には、このプロジェクトのコミュニケーションの手段としてベターなのはフェイスブックではなく、Eメールの方がいいだろうということになり変更になりました。私にとっては、フェイスブックを使ったコミュニケーションというのが一番難しかったです。来年度、一番楽しみにしているのは、夏休みが明けて、友たちとまた会えることです。家庭や地域での生活で一番の変化は、自立してきたことと自分に自信がついたことです。」

第2節 アイリーンの場合



「アイリーンといいます。私は、幼児期における栄養および健康についての勉強をしました。とても興味深いと思いました。このプログラムの存在については、母から聞きました。このプログラムに参加したいと思った理由は、自分もやはり大学で勉強したい。特に、兄や父が大学に行ったように私もそういうことをしたいと思いました。この IEP プログラムではそれができると知りました。私の大学生活では、メンターは、ジェミーという男子学生でした。彼は、授業が休講になったときには、スマートフォンでそれを私に教えてくれました。「今日は授業があるよ」とか「今日は授業が取りやめになったよ」と。私は、幼児教育ということで一貫してそれに関連した教科を勉強してきました。メンターのジェミーも同じコースに入っていました。ジェミーを通じて私はとてもいいたくさんの友たちを作ることができました。大学に入って一番良かったことについてですが、父は、UTS（シドニー工科大学）でエンジニアリングを教えています。それで、私もこの大学に通うので、一緒に家を出て、それであるところで、私はこっちの大学、父は向こうの大学と「じゃあね」というふうに別れます。一緒にそれができるとするのがとても嬉しいです。その他には、クラスメートができたということです。また、毎学期、授業でプレゼンテーションをするので、そこでとてもいい経験をしています。また、そのプレゼンをするためにいろんな人たちと会うということもとても楽しいことでした。特に教育学部の学生たちと一緒にプロジェクトを組んで、その結果をプレゼンしたというのはすごくいいことだったと思います。自分は先生になりたいので、教育学部の学生たちと「はらぺこあおむし」の絵本を一緒に作って学校で教える経験をしました。それをビデオに撮って、どのような教育がインクルーシブ教育か、健康、食事、アレルギーの原因、ピーナ

ツバターなどはアレルギーの可能性があるのでフルーツを食べましょう。そういうことをビデオにまとめて5分間にまとめてプレゼンをしました。1学期は13週間ですが、プロジェクトを組むのは真ん中くらいから始めています。一方、大学生活の中で一番難しかったことは、ある先生が早口すぎて、ちゃんとノートが取れないというのが大変でした。だから、取れるだけノートをとって家に帰ってそれを読み返してもう一度書き直すということをしました。来年度最も楽しみにしていることは、もっとたくさん勉強をすることです。それから、新しいコースで勉強するというのも楽しみにしています。」

第3節 アナリタの場合



「アナリタといいます。考古学と古代ローマの勉強をしました。とっても楽しかったです。というのは、講義に出ても内容が理解できたからです。それから講師の先生やメンターからいろいろなフィードバックをもらったこともとてもうれしかったです。私がこのプログラムを知ったのは、母がこのプログラムについてよく知っており、その母が私に教えてくれました。それから、父がシドニー大学に通ったのでよくこの大学に連れて行ってくれたので親近感がありました。このプログラムに参加してみようと思った理由は、まず私は人が好きで、いろんな人たちに会えるということがあります。それからこのプログラムではいろんな情報を提供してもらえるということを知ったからです。あとは、実際にメンターなどと一緒にいろんなことができるということもおもしろいと思いました。私は関心があることを今まではひとりでいろいろとやっていたわけですけども、考えたんですね。他にも同じように関心を持っている人がいれば一緒にやっていいんじゃないか、それからそのような同じ関心を持っている人と一緒に何かをやるとか、あるいは、バックグラウンドがまったく違う人と会う機会があって一緒に何かをやるといような人がいたら楽しいことだと思うし、あとはそうしたことをしながら自分をサポートしてくれるという人がいたらこれはとてもいいことだと思うんですね。それからもうひとつ、一方的に誰かがこれをしようというのではなくて、いろんな見方があるわけで、それを話し合うということはいろんな意見が聞けて、とてもいいことだと思います。それからあとは、自分で何か成し遂げたいという気持ちがあって、それができるんじゃないかなと思います。大学生活では、私には2人のメンターがいました。2学期のメンターはコリーナという人で、彼女は本当にいろんなことで手助けをしてくれました。よく携帯電話にテキストメッセージを送ってくれたんです。それから、教室の中では、メモ取りをしたりもしたし、また私がちゃんとついていけるかどうかをチェックをしてくれるということもありました。2学期の最初から最後までを通していろいろな形でサポートしてくれました。それから、あとはチュートリアル（個別指導）のときにも一緒についてきて手伝ってくれました。彼女自身は私と同じコースで勉強している学生でもありました。私がこの大学に入って一番良かったことは、視野が広がったということだと思います。物の見方が広がったと思います。たとえば、今自分の周りで何が起きているのかということについて、以前よりも意識が向くようになりました。また、母親に、今、自分が関心のあることを話したときに、

母にはあまり関心がないようなことがあるんですけど、それは私が母とは違う関心を持つ、つまり、自立して生きているということの現れだというように思うようになりました。もちろん、母は、それぞれの学期を通してサポートしてくれるし、実際に一緒に学校まで通うときについて来てくれたりするのですが、時々、『これじゃだめだ』『たぶんそれはやめにした方がいいんじゃないか』って思うことがあるんですね。そんなふうに分の考えが出てきてそれを母に話ができる、大学でこうこうこうだということをして母と話ができるようになったというのがとてもよかったと思います。母はちゃんと話を聞いてくれるし、理解をしてくれるというところがあるので、自分が思ったことをいろいろと話ができるということ、できるようになったということがとてもよかったと思います。私にとって大学生活の中で一番難しいと思ったことは、自分個人の生活と大学での生活とのバランスの取り方、どういふふうによればいいバランスが取れるのかということが難しいことだと思ひます。来年度の楽しみは、よりたくさん自由、選択肢がもっとたくさんあるということ、それとレクチャーを通してもっとたくさん知識を得ることです。」

第4節 アナリタの母、ラクシミの場合



「アナリタの母、ラクシミといひます。母親として自分の娘が大学でこうして勉強できるということは、とてもエキサイティングなことに感じています。また、そういう機会を与えられたことを、大変うれしく思ひます。私がこのプログラムについて知ったのは、仕事の同僚から聞いたということなんです。娘のアナリタは、学校を卒業した後に仕事をしていたわけですけど、もっとこういう機会があったらいいと考えていたんです。そのときに、職場のある友たちからこういうプログラムがあるよということを知りて、あとでEメールでそのプログラムの詳細を知らせてくれました。それがきっかけです。私がこのプログラムに関心を持った一番の理由というのは、娘のアナリタに大学に行く機会を与えてくれるものであったということです。娘が大学に行くということは、親にとっては不可能な夢なんです。ですから、娘に対しては、大学に行くとかということを取敢て勧めることはしませんでした。決してこんなことは起こるわけがないという考えがあったからです。しかしこのプログラムを知りて、特に、このプログラムがインクルーシブなものであるということで大変興味を持ちました。このインクルーシブというのは、すなわち、障害を持っている人たちだけのものではないということ、あらゆる人たち、学生たちに対して提供されるものであるということなので、娘の立場からしても大変興味がある、また大学に行くという夢を叶えてくれるものもある、また親として娘がそうした機会を得られるということは、本当に素晴らしいことだと思ひました。大学での最初のメンターは、娘とは違う学科を専攻していました。娘は考古学を専攻していましたが、メンターは他の教科を学んでいました。ただ、学業は別にしても、母親としては娘が同じ年齢の人と一緒に過ごす、そして、その人といろいろな話をし、そして支援をしてもらおうということは親の気持ちとしては安心できるというところがあります。それから、教科は違ひにしても、一緒にランチを食べるとか、そうした友人がいるということ自体がとても重要な点だと思ひました。そして、2

学期になって付いたメンターは、娘と同じ教科を勉強していた人でした。古代ローマについての勉強でしたが、彼女の場合には、社会的に時間を一緒に過ごすというようなことはあまりありませんでしたが、レクチャーを受ける上でどこに行けばどういう情報があるとか、勉強していく上でいろいろと役に立つアドバイスをしてくれたということがとても娘にとってありがたいことでした。今年度はアナリタは自尊感情も高まってきたし、それから自信もついてきたというのは明らかなんですね。ですから、来年度はもっと自立してほしい。通学の時も、ひとりで通学をしてみるというようなことを実際にやってもらいたいなと思っています。」

第5章 シドニー調査で学んだこと

第1節 IEP（統合教育プログラム）の意義

シドニー大学視察調査の中で、当事者学生、保護者から直接話を聞ける貴重な機会の中で一人の学生から「大学に通う前は自分に自信がなく何もできなかったが勉強を通して一人でも様々なことができるようになった」「大学に通うようになって変わったことは、自立してきたことと自信がついたことです」と自信をもって話をしてくれたことがとても印象に残った。これらの言葉や、言葉を話すときの生き生きとした表情、これらはどこから来るのだろうか。

シドニー大学の障害研究センター（CDS）では、障害のある学生の学びに対する専門的な研究と実践が継続されており、質の高い高等教育を提供する体制ができている。ここで注目すべきことは、学生自身が学びたい科目を選択し、受講することができるシステムがあることである。すなわち「与えられた学び」ではなく「自らが望む学び」であるということである。このことは、障害学生に、一般学生と同様に大学生活を過ごしているという意識と自覚を育んでいる。

また、一般学生と学ぶ際に生じるであろう困難に対しての支援も充実している。その柱となるのが、障害学生と一般学生とがペアになり、必要な支援を行う「メンター」の存在である。職員や学外のボランティアが支援するのではなく同じ大学の学生がメンターとして支援することで、ただ単に支援する、されるという一方向的な関係ではなく、時にはショッピングや同好会の活動などを一緒に楽しむ友人、仲間として接するという双方向の関係性が確立できるのである。これは、障害のある学生にとって、大学が自分の生活を楽しく豊かにすると実感できる上での重要なシステムだといえるだろう。

さらに、これらの支援やシステムに加え、2週間に1度のチュートリアル（個別指導）を導入している。ここには「障害があるから、ただ授業に参加していればいい」ということではなく、自分が学ぶべきことについてしっかり追究し深めるという大学本来の学びを障害のある学生にも経験させるという大学側の意図が現れている。

このように、障害学生の高等教育に関する研究の積み上げと実践を通してその学びと自己研鑽を尊重し、ひとりの人間として豊かに生きる権利を保障する取り組みを進めているのがシドニー大学の統合教育プログラムだといえるだろう。

障害のある学生が大学に通いながら様々な経験をすることで問題を解決したり、たくさんの友だちと関わるのが自信や喜びとなり、先に紹介した言葉となって表出したのであろう。また一般学生にとっ

でも、メンターとしてこのプログラムに参加することで、共に成長できる機会となっていることが明らかになった。「学ぶ」ということが誰にとっても大切で必要なことであるとあらためて認識することができた視察調査であった。

第2節 IEP（統合教育プログラム）を立ち上げる力

シドニー大学の統合教育プログラムもその基底に国連障害者権利条約の批准があることは日本と同様である。ただ、それを大学での「高等教育プログラム」として位置付けるために、熱意を持ち、核となる人物の存在があったことが印象的であった。

法制度は整備されてもどこから何をどのように進めていくのか、その最初の道筋をつけることはとても難しいことである。現に日本においては、障害者権利条約を批准しているにも関わらず、知的障害者の高等教育保障に関しては、足踏み状態となっており、未だスタートラインにさえ立てていない状況がある。特に、立ち上げ時の理念と方向性の明確化はその後の高等教育の在り方を決定づけていくものとなるだけに、高等教育関係者をはじめ、障害をもつ学生、保護者、一般学生など多くの人々の理解と共感を得る内容を備えていることが必要である。また、現実問題としてプログラムを実施する資金の調達も不可欠である。

シドニー大学において、その重要な役割を担ったのが CDS のセンター長 Patricia O'Brien である。アイルランドのトリニティーカレッジでの実践をオーストラリアに持ち帰り、トリニティーカレッジでベースとなっていたハイブリッドモデルをさらに発展させる形でシドニーエクスペリエンスを創出した。またその実現のための助成金の確保も実現している。これらは決して偶然が重なって実現したものではなく、研究実践の確かさ、関係者間の連携、プログラム実現への短期的かつ中・長期的ビジョンがあつてこそ可能になったに相違ない。このように、新たなプログラムを立ち上げるためには、その核となるリーダーの資質がとても重要である。

第3節 IEP（統合教育プログラム）実践の推進力

シドニー大学プログラムはまだまだ歴史が浅いにも関わらず着実に成果を上げている。その要因として以下のことが考えられる。

- ① 設立時における理念や手法の根底の部分がしっかりしている。
- ② その部分を引き継ぎ、改善・発展させる方向で推進する専門的知識・スキルを持つ人材が確保できている。
- ③ 研究と実践が一体化しており、単なる机上理論でなく実践による検証の重要性を強く認識している。
- ④ 広く情報収集に努め、最新の理論や実践について豊富なバリエーションに応えうる体制を整えている。
- ⑤ 外部評価を受けることにより、より実践的なプログラムへと改善していく姿勢を貫いている。
- ⑥ プログラムを大学内での実践レベルで終わらせることなく、理念の推進と実現のために社会企業

モデルの構築を視野に入れるなど、将来へのビジョンを明確に持っている。

このように、理念や実践の継続、実践の評価、新たな枠組みづくり、大学や国を超えた広範な情報収集と必要な情報の共有などを駆使しながら、実践の歴史は短くとも確実に成果をあげているのがシドニー大学の統合教育プログラムである。研究、実践の良し悪しは、その取り組みの長短ではなく、目的遂行への熱い思いと、それを実現、発展させていくための総合的な視野と発想、有能な人材、そして実践を改善していくため自らの実践に対し外部評価を受け入れる謙虚さによることが明らかになった。

第4節 シドニー大学 CDS（障害者研究センター）の研究体制

シドニー大学 CDS には、様々な分野の博士、研究員が集まっており、それぞれの役割が決まっている。そこにはメンターと呼ばれる一般学生のボランティア支援者、チューターと呼ばれる個別対応講師が中心となって障害学生のサポートを行っている。さらに、研究チームはそのバックアップとして障害学生がどのようにプログラムを遂行していくのか、またその実践においてどのような成果を出しているのかについての研究のプロセスを決めている。それにより、2年間という大学在籍期間の中で、確実に障害学生に対するアプローチが重ねられているのである。また、障害学生自身も同世代のメンターから学習支援、余暇や生活の中での支援だけでなく同じ大学の学生たちとコミュニケーションをとり接することで統合が図られている。

シドニー大学でこのプログラムが始まりわずか3年の中で、ここまで確実に研究と成果を上げるためにはこれだけのプロジェクトの大きさがあるからこそ可能であったに相違ない。

おわりに

今回は視察調査という形で、知的障害者にとっての大学教育の意義、その実施体制などについて学ぶことができた。実際に大学のキャンパスに足を踏み入れ、関係者や当事者と出会い、直接話を聞くことによって感じることは、他のどんな方法より得るものが大きいことをあらためて感じた。しかし、我々は、時間的にも財政的にも常に現地に出向いて調査できるわけではない。視察調査で学んだことを最大限生かしながら、今できる方法は何か、その方法で何を得られるか、学生たちに何が提供できるか、どのようなプロセスでそれらを実現させていくべきかなどについて整理し、優先的に行うべきことを判断して日常の研修を充実させていくことが必要である。

しかし、2年間で10人という学生数はオーストラリアの知的障害者の人口からして非常に少ない。今後多くの知的障害者が大学で学べる体制を整えるにはまだまだ課題があると予測される。一部の知的レベルの高い学生だけでなく、どんなに重い知的障害者であってもサポートできる教育体制というのは統合教育だけでは難しいと考えられる。その点において、「ゆたかカレッジ」は重度から軽度まで学びたいと思う知的障害者を積極的に受け入れ、社会に出るまでにさらなる学びを通して“自信”を身につける場所となっている。我々の目標は、学生たちに「レジリエンス」（くじけない心）と「自信」を身につけさせて社会に送り出すことである。残念ながら、現段階において、我々「ゆたかカレッジ」は、大学における研究チームも、研究予算も持ち合わせていない。したがって、現場の支援教

員による試行錯誤と互いの切磋琢磨による教育実践研究がカギである。その役割の重要性と、世界から見てどれだけ我々が素晴らしく意義深いことを行っているのかを改めて感じることができた。

日本の大学においては、知的障害者の受け入れはほとんど行われていない。しかし多くの研究者がこの分野、このプロジェクトに興味や関心を持っている。今後は、大学との協力関係を密にし、大学内にカレッジを設立し、各専門分野との協力を高め研究、実践を重ねることで「ゆたかカレッジ」がイニシアティブをとり日本の知的障害者の高等教育を提供できる場、障害をもった方々の新たな道、希望の道として広めていく責任がある。今回の調査で学んだこと感じたことを支援教員と共有し、学習環境をさらに充実させ、目の前の学生がレジリエンスと自信を身につける教育を提供していきたい。

今回のシドニー大学訪問を通じて、我々「ゆたかカレッジ」研究チームは、日本においても、知的障害者の高等教育保障を早急に実現すべきであることを再認識した。昨年1月、わが国は、障害者権利条約を批准した。そして、来年4月には、その具体化のための国内法として、障害者差別解消法が施行される。障害者権利条約に規定された「合理的配慮」とは、障害者一人ひとりが必要とすることへの対応である。障害者が合理的配慮を求めた場合、その要求は広く一般の人に法的拘束力を持つとされる。特別支援学校高等部卒業後「もっと学びたい」「もっと自信をつけて社会に出たい」「青春を謳歌したい」という障害者の教育ニーズに対し、障害を理由にその機会を保障しないことは、合理的配慮の視点からも認められない時代が到来した。

私たちは、今後も、世界の先進的な知的障害者高等教育のシステムや実践に学びながら、当法人が運営する福祉型大学「カレッジ」においてそれらのニーズの実現を図るとともに、日本の高等教育機関が知的障害者を排除することなく、一日も早くインクルーシブな教育を推進する時代が訪れるよう、今後も最大限の努力を行っていきたい。

最後に、この海外視察調査の実現のために助成をしていただきました公益財団法人木口福祉財団様、フロントップ株式会社様、大福産業株式会社様はじめ、物心両面にわたりご支援下さったたくさんの皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。